

秋吉敏子

クラシック・エンカウンターズ  
スタジオインクス#YZSO-10012 ¥2,500(10.6)

Jazz Fusion



①4分52秒②1分37秒③1分57秒④1分57秒⑤1分57秒⑥1分57秒⑦1分57秒⑧1分57秒⑨1分57秒⑩1分57秒⑪1分57秒⑫1分57秒⑬1分57秒⑭1分57秒⑮1分57秒⑯1分57秒⑰1分57秒⑱1分57秒⑲1分57秒⑳1分57秒㉑1分57秒㉒1分57秒㉓1分57秒㉔1分57秒㉕1分57秒㉖1分57秒㉗1分57秒㉘1分57秒㉙1分57秒㉚1分57秒㉛1分57秒㉜1分57秒㉝1分57秒㉞1分57秒㉟1分57秒㊱1分57秒㊲1分57秒㊳1分57秒㊴1分57秒㊵1分57秒㊶1分57秒㊷1分57秒㊸1分57秒㊹1分57秒㊺1分57秒

ジャンルを超えた魂の交流

非常にユニークかつ画期的な作品の歴史である。ジャズの秋吉敏子、クラシックの本荘玲子。クラシックの名曲を題材にして、最初に本荘が原曲を演奏、それを受けて秋吉が原曲をジャズ化して演奏する。ジャズとクラシックの真剣ガチバトルという趣向だが、全然違う顔の共演には聴きすぎ、クラシックジャズへの流れも違和感を与えない。味わいの深い演奏に耳を傾けていれば、次第に胸が高鳴り、熱いものがこみ上げてくる。ジャンルを超えて、二人のピアニストの魂が共鳴しながら、魂から魂へ音楽が流れる。そんな印象である。名匠の傑出したテクニックの賜物でもあるのだろうが、この崇高な音楽家同士云々は愚問。秋吉と本荘は半世紀以上わたり交流がある親友である。だからこそ、実現し、到達した高みがあるに違いない。ジャズ・ピアニストにはクラシックに通じる人が多いが、秋吉もそうだ。収録曲に関する秋吉のエピソードは、彼女のもうひとつの側面を伝えて興味尽きない。(高井信成)

問：スタジオインクス  
TEL 03-5773-1701

山中千尋

フォーエヴァー・ビギンズ  
UC・フューヴ#UCCJ-2083 ¥3,000(9.22)

Jazz Fusion



①ソウ・ロング②ブルー・パール③サマーユージュ④チロキ⑤Snow⑥グッド・モーニング・ハート⑦思い出は僕ら⑧フォーエヴァー・ビギンズ⑨ザ・ムーン・ワズ・イエロー⑩アヴァンセ/演奏：山中千尋(p)ペン・ウイリアムス(b)ケントリック・スコット(d)・録音：2010年5月16日、6月20日 ニューヨークアヴァンセ・スタジオ

弾きまくっている!

2009年のベニー・グッドマン追悼作をはさんだ、約2年ぶりのトリオ新作。全体的な印象は「弾きまくっている」、パド・パドエルの正統後継者をアピールする②、スロー&アップのリズム変化で独自性を打ち出す③、ラテン&スウィングな④。簡美京平⑤の高速ピアノに、何がここまで山中を駆り立てたのか、との疑問が湧き、その答えを見つけるために最後まで聴きし通した。今できるベスト・プレイをこの瞬間に記録しておかなければならない。そんな切迫感と危機感に満ちた思いが、山中にエネルギーを与え、衝き動かしたのだらう。旋律に主眼を置いたという選曲にあって、オールド・スタイルのスタンダード風な①の口ずさめる自作メロディに、本作の主題が象徴されている。近年勢いに乗る新鋭ベン・ウィリアムスと、山中とは気心の知れたオールドリック・スコットとのチームワークも抜群。松風航一⑥の③、エリス・レジーナの歌唱版がある⑦、イエロー・ジャケッツの⑧など、毎度ながら独自の視点による選曲センスも楽しい。(杉田空樹)

マンハッタン・ジャズ・クインテット

ラティノ・パップ  
BRDS RECORDS#XQ2A-1017 ¥2,800(9.22)

Jazz Fusion



①エル・クンパンチェロ②ベサメ・ムート③ウォラレ④リベルタンゴ⑤ラ・マラゲニャ⑥グナタ⑦スクエイ(キエンセ)⑧タボ⑨リシエン・フルフ/演奏：デビッド・マシューズ(p)ルンソフ(b)アンディ・スニッツァー(ds)フランソワ・ムン(b)ビクター・ルイス(d)・録音：2010年3月11、12日 ニューヨークアン・サウンズ・スタジオ

新メンバーで挑む楽しいラテン・ジャズ

親日家で知られるデビッド・マシューズ率いるマンハッタン・ジャズ・クインテット(以下MJQ)。84年に結成して以来、コンスタントにアルバムを発表し、その度ごとに日本で圧倒的な支持を得ている彼らだが、今回届いた新作はラテン音楽にスポットを当てた、カラフルで熱い仕上がり。一番のポイントがメンバー・チェンジだ。ベーシストにバリ出身、現在、ニューヨークを拠点に活躍中のフランソワ・ムンが加入し、キャリアを積んだグループに新たな息吹を送り込んだ。アルバムのおープニングを飾る「エル・クンパンチェロ」ではいきなりフランソワの情熱的なソロをフィーチャーし、彼の参加を印象付けている。ほかのメンバーも過度な自己主張をしながらMJQらしいサウンド作りを徹底しており、いわゆる「楽しめる」ラテン・ジャズをこそとばかりに展開。実際には高度なテクニクを要する楽曲でもサラリとプレイしてしまう彼らは、まさにプロ中のプロ集団といっていだらう。(菅野 聖)

マックス・イオナタ・オルガン3+ファブリツィオ・ボツ

コーヒー・タイム  
アル・ゴレ・ジャズ#AUCB-011 ¥2,520(9.15)

Jazz Fusion



①COFFEE TIME IN N'OUT②DONNA③KISS④E.S.C.⑤SAFARI⑥MONA LISA⑦ALL BLUES⑧CHANG'S SONG (dedicated to Gianni Bossi)/演奏：マックス・イオナタ(b)ルカ・マンヌツァ(long, Rhodes)ロレンツォ・トッチ(d)ファブリツィオ・ボツ(sp, fl)・録音：2010年6月1、2日・イタリア・ローマ「カーゼ・デル・ジャズ・スタジオ」

伊の優美による独創オルガン作

イタリアのハード・ポップ・シーンを支え、現代ジャズ・シーンのなかでも別格にホットなテナーマン、マックス・イオナタ。後の新プロジェクトは、日本人気の高いファブリツィオ・ボツをフィーチャーしたオルガン・バンド。ボツのトランペットが時に鋭く切り込み、高らかに鳴り響く。切なく哀愁を漂わせる。イオナタはより思案的に情念を燃やしたソロを取る。そんな赤い炎と青い炎のよそよそ二人に、ルカ・マンヌツァのモーダルなオルガンが絡む。伝統的なジャズ・オルガンの系譜を踏まえつつ、まるで発明されたばかりの楽器の音色かと思ってしまうようなく、独自のニュアンスで弾きまくる。ハイ・ファイブのドラマーであるロレンツォ・トッチが、ジャズ、ファンク、ラテン、ソウルなど現代イタリア・ジャズに求められている要素をグループ内に押し出すことで、4人のケミストリーが発生。今の時代にふさわしい豊かで深い内容を持った作品となっている。(松本誠一郎)